

複式学級における国語科の指導

1 はじめに

へき地・小規模校は、教育設備面においてさまざまな困難条件がある。それを克服しながら、地域の特性を生かした教育実践を積み上げ、指導者たちは本物の教育を展開してきた。現代社会におけるへき地教育は、かつての「へき地の三特性」といわれた、いわゆる劣性で捉えるのではなく、へき地なるがゆえになしうることの多い優性としての発想で実践が進められている。へき地教育にこそ、教育の原点があるといわれている。子どもたちは、地域の自然に学び、歴史に学び、人に学ぶ中で、その資質と能力を育んでいく。

2 複式学級の特性を生かして

「令和元年度学校基本調査」（文部科学省 令和四年五月一日現在）によると、全国の小学校には複式学級は四四一四学級ある。最近五年間の推移では、若干の増減はあるものの、約四五〇〇学

級前後を推移しており、これは全体学級数の約二％に当たる。また、同調査によれば、複式学級を多く有する都道府県としては、北海道（複式学級数／全学級数＝五四一／一一七八四）、鹿児島（四九一／四九七三）、福島（二〇七／四五〇五）となっている。

また、全学級数に対して複式学級数の割合が、約二％以上を占めている県は二七県あり、約五％以上を占める都道府県は、北海道・岩手・和歌山・島根・山口・愛媛・高知・鹿児島である。逆に複式学級を有しない都道府県は、皆無である。

すなわち小学校教員は全国のどこにあっても、複式学級における授業を展開することが求められる。

一方で、複式学級解消への動きも見られ始めていることも確かである。少子化がさらに進むことが予想される中、義務教育の機会均等や水準の維持・向上の観点から、文部科学省から自治体ごとに学級規模の適正化について、検討を進めるよう通達されている。今後、学校の統廃合により、複式学級が解消される地域も見られることになる。

しかし、文部科学省が「公立小学校・中学校の適正規模・適正配置等に関する手引」少子化に対応した活力ある学校づくりに向けて」（平成二十七年一月二十七日）の中で指摘したように、「市

複式学級における国語科授業の設計

(1) 学習指導計画の立案

複式学級は二つの学年を同時に指導するため、指導内容、指導方法については実態に照らし合わせて特別な工夫が求められる。

町村の中には、様々な事情から学校統合によって適正規模化を進めることが困難であると考える地域や、小規模校のまま存続させることが必要であると考える地域も存在する」とし、その場合は「児童生徒への教育を充実させるために、小規模であることのメリットを最大限に生かした方策や工夫」が求められるとしている。そして、教育の充実が図られる工夫が施された場合には、小規模校の存続もありうるとしている。

現場の先生方の前には、子どもがいる。一人一人の資質や能力を伸ばしていくことを目的とした、複式学級の指導方法について実践的な理解を積極的に進め、工夫した授業を展開していくことを大切にしたい。

また、『令和の日本型学校教育』の構築を目指して、全ての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの実現（「答申」）（令和三年一月二六日中央教育審議会、以下「令和三年答申」）で強調された、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体化した姿としても、複式学級指導法に注目したい。複式学級において、児童自身が計画・時間・手順を確かめつつ、相互に磨き合い高め合う姿は、「令和三年答申」で求められた、多様な子供たちを誰一人取り残すことなく育成し、多様な個性を最大限に生かすという主旨と重なる。複式学級の指導法のよさを再認識し、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげたい。

一般的に単元構成は次の三つに分けられる。（参照「小学校複式学級指導資料 国語編」一九八五年 文部省）

- | | |
|-----|-----------------------|
| (1) | 国語科と他教科との組み合わせによる学習指導 |
| (2) | 異単元指導による学習指導 |
| (3) | 同単元による学習指導 |
| | ① 同単元異教材
② 同単元同教材 |
| | 学年別指導 |

複式学級を有する学校では、同じ時間に同じ教科を指導している場合が多く、(1)の国語科と他教科との組み合わせによる学習指導は、全国的に見てもあまり実施されていないようである。(2)の異単元指導による学習指導（学年別指導）は、学年別に学習指導計画を作成し、それぞれを指導するため、指導者の教材研究、資料等の準備に多くの時間が費やされ、直接指導・間接指導の組み合わせも複雑になるため、学習の効率がよいとはいえない。反面、学年の発達段階、教科の系統性に応じた指導が可能であり、二つの学年の能力差が大きく、同じ目標を設定できない場合や教材によっては効果のある方法である。

(2)の異単元指導による学習指導のよさを次に挙げる。

ア 学年別に指導計画を作成するので、指導者にとっても児童にとっても、指導内容が分かりやすい。

イ 直接指導・間接指導・同時間接指導を組み合わせることに
より、指導方法が広がる。

ウ 間接指導時における児童の自主学習力が向上する。

エ 同じ空間で学習する異学年の児童は、次年度に学習することや前学年学習したことに触れられるので、予習になったり、

復習になったりと、複式ならではの学びがある。
課題として次のような点がある。

ア 教師の教材研究が多くなるので、複式では担任を固定するのが望ましい。

イ 教具等次年度も使えるものは保存方法を工夫する必要がある。

ウ 児童に自主学びの方法を身につけさせなければならない（教師が出すすぎない、発表のしかた、教科系の授業の進め方等）。
(3)の同単元（あるいは同領域）による学習指導は、二つの学年に共通する目標を設定し、ときには共通の題材や話題を取り入れながら学習を展開する方法である。学年ごとに適切な異なる教材で行う場合（同単元異教材）と同一教材で行う場合（同単元同教材）がある。

この指導法は、共通する目標、学習活動に共通する部分を計画することによって、指導者の負担を少なくし、学習指導の効率を高めることができる。また、指導計画に発表や話し合いの機会を多く設定し、二つの学年の協力的な学習態度、自発的な学習意欲を喚起することも可能である。現在、学習指導要領の目標が二学年でまとめて示されているので、この方法は、今後、より多く実践が累積されていくことであろう。

同単元同教材は、異年齢の学年を一つの学級として指導する方法である。この場合、指導者にとっては指導を効率的に行うことができ、児童にとっては学年差というよりも個人差の大きい一つの学級集団としてまとまりのある学習に取り組むことができる。

また、二つの学年の交流によって相互に刺激し合い、学習意欲が高まっていくことも多い。学年の順序によらない同単元同教材指導には、次に挙げるよさが考えられる。

ア 異教材指導と比較し、指導者の授業の準備時間が軽減され、一つの教材研究に十分な時間の確保ができる。

イ 同時内に異学年を指導するため、児童の思考に連続性があり、学習活動も分断されることが少ない。

ウ 同じ時間帯に同じ内容を学習するため、児童は落ち着いた雰囲気の中で取り組み、学習意欲も喚起される。

エ 指導者は、じっくり児童を把握することができ、個々に対して的確な指示、助言を行うことができる。

課題としては次の点が挙げられる。

ア 同教材指導の指導計画（A・B年度方式）の作成には、二つの学年の指導事項を分析し計画するため、多くの時間と労力を必要とする。

イ 年度によっては学年を超えた内容を学習するため、下の学年には学習に負担を感じることのないように十分な配慮が必要である。

ウ 国語科の場合には、「学年配当漢字」があるため、学習する教材と別に漢字指導を行うなどの措置が必要になる場合がある。

エ 他の学校へ途中で転出する児童が出た場合、未履修の部分が生じる。

オ 上学年、下学年の児童の能力が逆の場合もあり、子どもたちの関係に配慮しなければならない。

(2) 直接指導と間接指導の工夫

複式学級の指導の難しさは、二つの学年を同時に指導しなければならない点にある。同単元異教材の場合、児童の思考の流れを分断することなく、指導過程をどのように展開するか。直接指導で何を扱い、間接指導にどのようにつなげていくかが問われる。

へき地・複式学級を担当する指導者の悩みは、この直接指導・間接指導の効果的な在り方であろう。

これをもとに、指導上配慮すべき点をいくつか列挙してみよう

（「学習指導展開例」参照）。

まず、導入段階である。どのような課題を提示するかによって、一時間の学習の流れは大きく変わってくる。学習目標は、二つの学年の児童の実態を見据えて厳選し、学習意欲を喚起するような課題を提示することが必要である。また、児童が一時間の学習の流れに見通しがもてるように、導入段階での説明は明確に、指示は具体的に言うことである。「何のために、何を学ぶのか」を把握した児童は、見通しをもち積極的に学習に参加し、主体的な学習態度を身につけていくからである。

学習指導展開例

学習活動	指導形態		学習活動
1 導入	直接指導		1 導入
2 3 4 5 展開	直接	間接	2
	間接	直接	3
	直接	間接	4
	間接	直接	5
6 終末	直接指導		6 終末

展開時の直接指導と間接指導は、時と場合によって学年の軽重も考えて臨みたい。学習内容、指導者のねらいによって柔軟に変更し、一年間という長いスパンで個々の児童を育てていく指導計画を作成しておくべきである。そうすれば、この単元で児童に身

につけたい能力、一時間で押さえたい目標を絞り込んで授業展開することができるのである。

時間の少ない直接指導を有効に活用するため、その時間のねらいはできる限り絞り、児童の「書くこと」を核とした思考活動が次の直接指導に生きたる間接指導の場を設定していきたい。また、間接指導時には「話すこと」も大切な学び方であり、音読も有効である。このときの間接指導を充実させるためには、児童の思考の筋道が見えるワークシートの作成、言語活動を促進させるリーダーの養成が大きな鍵となってくる。

自主的に学習を進めている間接指導時に、児童が教材、教具（ICT）、ワークシートなどを自由に利用できない場合は学習が中断する。そのため、学習の手順、教室の教材、教具（ICT）の扱いなどの指導は日頃から徹底しておく必要がある。教師の課題が曖昧なときは、教師も課題作りについて研究しなければならない。

終末の段階は、二つの学年を一斉に直接指導することも多い。この場合、それぞれの学年の学習成果を発表させ、刺激し合う場をもちたい。お互いに、他の学年は何をどのように学んでいるのかを知り、その学年の国語力に触れ合う終末段階の一斉指導は、次からの児童の学習に好ましい影響を与えることになる。

また、間接指導時の教材・教具として、ICT機器の活用も考えたい。電子黒板、実物投影機、児童生徒用PC等に加え、二次元コードを活用したい。この二次元コードは、全学年の教科書に付せられていて、タブレットやスマホをかざすだけで、教科書教材と関連する資料を閲覧できるようになっている。

例えば、一年上「うみの かくれんぼ」では、「もくずしよいが海藻を体に付ける様子の動画」があり、二年上「ふきのとう」では「作者の工藤直子さんの動画」が見られる。三年下「ありの行列」では「ありの行列ができる様子の動画」が、四年上「一つ

の花」では「配給・防空頭巾の写真」、五年「古典に親しもう」では「浦島太郎の動画」、六年「イーハトーヴの夢」では「宮沢賢治に関する動画」など、低学年六三コンテンツ、中学年六五コンテンツ、高学年五七コンテンツ、合計一八五コンテンツが準備されている。子どもたちは、二次元コードによる資料を子どもたちどうしで楽しみながら活用することで、感想や疑問を述べ合ったり、すぐに学校図書館やPC検索の利用につなげたりするなど、少人数ならではの良さを発揮した間接指導が展開されることになろう。

(3) 学習リーダーの養成

複式学級の間接指導の効率化を図るには、学習リーダーの育成が欠かせない。少ない直接指導の時間を有効に活用し、学習の効果を上げるために「リーダーの手引き」を準備し、児童を育てていきたい。リーダーによるグループ学習は、自由な話し合いの雰囲気も作り、次の直接指導を効果的につないでいく場合も多い。この間接指導で重要な役割を担うリーダーをどのように養成していくか、指導者の意図的、継続的な実践力が問われるのである。

下段に示したような手引きを持たせ、低学年の頃から学習リーダーを育てる意図的・継続的な取り組みが、間接指導の効率化を図り、児童自らが学習を進める態度を育成することになる。

ある学校の一つの単元での学習リーダーの進め方を、学習の手引きから見よう。

毎時間の授業は書く活動を位置づけて展開すること。ワークシートに書き込ませ、課題に対する考えを一人一人にもたせること。課題をどのように解決していくか、学習リーダーを中心とした話し合いの場を設定すること。児童が主体的に学習を進める間接指導は、学習本来の姿である「児童が自ら学ぶ教育」につながるのである。

そのためには指導者として心がけておきたいことがある。少人

数の複式学級では児童の実態把握が容易である。どの単元でどの子にどのような言語力の育成を目指すか、指導者は年間を通しての指導計画を構想し、個々の具体的な目標を設定し、指導内容を整理して授業に臨むことが必要である。

低学年の頃から書くこと、話すこと、読むことを日常化し、それぞれの考えを学習リーダーを中心とした場で交流させ、振り返りを定着させること。児童が自力で学習に取り組むためには、指導者側の事前の綿密な指導構想、教材のしかけ作り、継続的な実践によって学習効果が期待できるのである。

今日の学習の進め方（司会者）

- 1 今日の学習のめあては○○です。
- 2 今日の場面を読みましょう。
 - ・ 自由読み、一斉読み、順番読み、役割読み、黙読等
- 3 ワークシートに考えを書きこみましょう。
 - ・ 一人学び
- 4 どの文をもとにして考えたかを書く。
 - ・ 考えを発表しましょう。（指名）
- 5 ワークシートを黒板にはって説明する。
 - ・ 小黒板を使って説明する。
 - ・ センテンス黒板を使って説明する。
 - ・ 記録担当が黒板に書く。
- 6 発表を聞いて質問はありませんか。
 - ・ ワークシートの（ ）を話し合います。
 - ・ 同じところ、ちがうところはどこですか。
 - ・ どうしてちがっているのでしょうか。
 - ・ どこからちがってきたのでしょうか。

複式学級Ⅱデメリットばかりのイメージがあるが、少人数のため一人一人の学習状況を把握でき、きめ細かな指導が行いやすいというメリットもある。また、発表できる機会の増加や、教材・

意見がまとまらない場合

・もう一度教科書を読みましょう。

・分かったことを書きこみましょう。

・二人（グループ）で話し合ってみよう。

・話し合いから気づいたことは何でしょう。

7 友達の発表から、自分の考えをまとめましょう。

8 今日の学習の振り返りを書きましょう。

(4) 実践例

複式学級の授業は、二学年分の教材研究を必要とする。「働き方改革」が叫ばれる昨今、やるべきことを整理し、焦点化を図っていくことが大切である。そこで、効果的に複式授業を進めるために、簡略化した「単元計画」を作成・累積し、学校全体で共有・保管していくことが大切である。

なお、簡略化した「単元計画」を作成する場合には、国語科の目標が二学年まとまりであることの意味を考え、同系統の教材（例：文学的文章を同じ時数で計画する）が扱えるように考慮したい。また、学年の発達段階や教材の特質を考え、二学年の学習活動の量・質についての差異を明確にしたい。

次ページには、簡略化した「単元計画」のモデルとして、第一学年及び第二学年「読むこと」の計画案を紹介する。

教具などを一人一人に行き渡らせやすいという点も挙げられる。

しかし、どうしても多様な意見に触れる機会が少なくなること、他校の言語活動の映像資料等の活用、「姉妹校」との連携（集合学習、「共同学習」等）といった、学校ぐるみの学習活動が重要である。

また、現在では、年間の行事予定や指導計画を複数校間であらかじめ調整したうえで、複式学級どうしをテレビ会議システムでつなぐ遠隔授業などの実践事例も多くなってきた。

言葉の力をつける複式学級の指導法は、各学校で有効な手立てを工夫することで、乗り越えられる課題も多い。むしろ、大規模校で実現が難しい課題も、複式の良さ、少人数の良さを発揮すること、大きな効果を挙げられる。少子化の時代を迎える今、日本全国で複式学級の指導に向き合う時代が来ていると言っても過言ではないだろう。また、冒頭で述べたように、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化を具現化した姿として、全国各地でその意義が再認識されるだろう。多くの教師が、目の前の子どもたちのために、知恵を出し合い、今後一層力を結集していくことを願って止まない。

複式第 1・2 学年 国語科単元計画

- 1 単元：1 年 よんで かんじたことを はなそう「ずうっと、ずっと、大すきだよ」（光村 1 年下）
2 年 思いうかんだことをもとに、お話をしようかいしよう「みきのたからもの」（光村 2 年下）
- 2 目標（※主目標のみ掲載）

【第 1 学年】

- ◎ 内容の大体を捉え、文章の内容と自分の体験を結び付けて感想を持ち、友達に紹介する。
（C 読むこと イ・オ・カ）

【第 2 学年】

- ◎ 等身大の人物と自分を比べ、場面の様子や人物の言動を具体的に想像して感想を書き、友達と共有する。（C 読むこと イ・エ・オ・カ）

3 指導計画（第 1 学年10時間、第 2 学年10時間）

過程	主な学習活動【第 1 学年】	主な学習活動【第 2 学年】
つかむ (2 時間)	1 学習のめあてをつかむ。 ※活動例 ・これまで読んだ本の中で、気に入った本を紹介し、紹介の観点「だれが」「どこで」「何をした」をつかむ。 ・教材「ずうっと、ずっと、大すきだよ」を読み、試しの紹介文を書く。 ・うまく書けなかった内容について、学習していくことを確認する。	1 学習のめあてをつかむ。 ※活動例 ・「自分にとっての宝物」というテーマで、話し合う。 ・教材「みきのたからもの」を読み、試しの紹介文を書いてみる。 ・うまく書けなかった内容について、学習していくことを確認する。
しらべる (5 時間)	2 教材を読み、友達に紹介したいところを見つける。（内容の把握・解釈） ※発問例 ・どうしてエルフは「ほく」の犬なのかな。 ・どうして「ほく」はエルフに大すきと言ったのかな。	2 教材を読み、友達に紹介したいところを見つける。（内容の把握・解釈） ※発問例 ・どうしてみきは、リボンをわたしたのだろう。 ・どうしてみきは、ナニヌネノンのことを誰にも話さないのだろう。 ・心に残った言葉や文をぬき出そう。
ふかめる (2 時間)	3 お話全体の紹介と、特に心に残った場面を友達と紹介し合う。（共有） ※活動例（異学年交流も考えられる） ・「だれが」「どこで」「何をした」という観点から、紹介文を書く。 ・書き上げた紹介文で、友達と感想を伝え合う。	3 お話全体の紹介と、特に心に残った場面を友達と紹介し合う。（共有） ※活動例（異学年交流も考えられる） ・お話全体のあらすじを書く。 ・特に心に残った言葉や文章を紹介し、心に残った理由についても、紹介文の中に入れる。 ・紹介文を交代して読み合い、感想を伝え合う。
ふりかえる (1 時間)	4 試しの紹介文と完成した紹介文を比べて、自分の成長を実感する。 ・たくさん書けるようになったよ。 ・好きな場面に選んだ理由が言えたよ。	4 試しの紹介文と完成した紹介文を比べて、自分の成長を実感する。 ・教科書冒頭の資料「国語の学びを見わたそう どうやって 学んでいくのかな」を使って、自分たちで振り返る。 ・分かったこと、できたこと、まだ分からないことなどについて、話し合う。